

書評

## 森 正人 著『ハゲに悩む——劣等感の社会史』 筑摩書房, 2013年, 211p., 760円 + 税

Masato Mori, *Baldness trouble: social history of inferiority complex*, Tokyo: Chikuma Syobou, 2013.

神田 孝治

Koji Kanda

和歌山大学観光学部

「もうすぐにアルシンドになっちゃうよ。」これは1993年に放映されたカツラメーカー・アデランスのCMにおいて、頭頂部が禿げあがったJリーグのサッカー選手であるアルシンドが、薄毛男性の頭頂部をのぞき込んで発した言葉である。1993年にJリーグが開幕した時に私は大学生であったが、鹿島アントラーズの選手として活躍するこのアルシンドを見る度に、そこに将来の自分の姿を重ね合わせて不安感を募らせていた。その頃から自分の毛が比較的薄いことを自覚していた私に、次々と追い打ちがかけられる。大学時代には、友人同士で語る将来のハゲ予想ランキングで上位に位置し（結果的に、多くの友人が私を上回るスピードで毛を失っていったのだが）、中国の怪しい毛生え薬101を友人にプレゼントされた。その後こうした事例には事欠かないが、ここ一ヶ月以内を振り返ってみても、上司にあたる先生に毛がワサワサになるシャンプーを紹介されている。それどころか、この書評を書いている日にですら、座っている私の後頭部を眺めた薄毛仲間の同僚の先生に、薄毛が進行していることをしみじみと指摘されたのである。そもそも日常生活において、週一回は自分が薄毛であることを思い出させられる。観光学部唯一の講義室は、T101という先の毛生え薬を彷彿とさせるネーミングであるが、やたら急角度に配置された学生の座席からは、教員の頭頂部が丸見えであり、まさに視線の暴力装置となっているからである。そして、かかる講義室を思い浮かべながら、本格的にハゲた時に、いっそスキンヘッドにしようかとか、あからさまなカツラで笑いをとろうかなどと考え、苦悩する日々……。

ついつい力が入って長い導入になってしまったが、とにかくハゲというものは私にとって大きな悩みのタネ、不安の源泉なのである。まさにこうした悩みを分析した書籍として、『ハゲに悩む——劣等感の社会史』が刊行されたのであり、私はすぐに同書のページを繰ることになった。筆者は、私と同じく文化

地理学を専門とする森正人氏であり、長年の付き合いがある薄毛仲間である。本書は、男性の身体に対する劣等感や不安感について、主としてハゲを取り上げ論じたものである。具体的には、ハゲが歴史的にいかんにか語られてきたのか、そしてその改善がどのような商品・手段によって果たされようとしてきたのか、といった点を詳細に検討するなかで、男性の身体的劣等感という感情の発生について考察している。平易な文章で書かれた読みやすい新書であるためここでは詳細に触れないが、全体の輪郭および特徴を示すために以下にその章立ておよび節一覧を記しておく。これを一瞥すれば、その内容の面白さが想像できるであろう。

- 第1章 身体、この悩ましきもの——チビか、デブか、ハゲか  
コンプレックスを振り返る／肥満的身体への介入／男らしさと美しさ／社会化されるコンプレックス／劣等感に気付かせるキーワード／自己の配慮と若者の不安感
- 第2章 薄毛問題の系譜——文明開化と高度成長の終焉  
髪への願いは神頼み／江戸時代の薄毛事情／鬼に舐められてハゲる！／ハゲの「十徳」／近代的な視点から見た議論／各国薄毛事情と近代／頭髪が語りかける人間性——ハゲは頭のよい証拠／頭髪が語りかける人間性——ハゲは善人が多い／頭髪が語りかける人間性——ハゲは性欲が強い！／近代の価値転換／ハゲもまた楽し
- 第3章 叩けば生える！——踊る民間療法  
夢の育毛剤？／毛はえ薬から育毛剤へ／各国の育毛剤事情／創世期の養毛剤市場／当時の養毛剤

の効果のほどは……／男性用化粧品と頭髪用化粧品の登場／オープンで明るい養毛剤へ／紫電改とブラシ／第一次養毛剤ブームの到来／イメージの転換と私的な悩みの公共化／第二次養毛剤ブーム／「毛髪再生精 101」という事件／中国製育毛剤の吸引力／日常生活、そして体内への浸透

#### 第4章 髪は長い友だち——カツラとファッション

時代は女性用ウィッグ／舞台とカツラ／戦後の女性カツラ／西洋のかつら事情変遷／男性用かつらの時代／「生え際の魔術師」アートネイチャーの躍進／アデルランスの創業／アデルランスの広告戦略／かつら被害／私的な悩みの家族化／コマーシャルにみる再帰的自己／そして、増毛へ

- 第5章 お医者さんに相談だ——治療対象になった頭髪
- 男性型脱毛症の診断／男性型脱毛症と指南役たち／医学的まなざしの違い／禿頭病の流行／禿頭病治療薬と育毛剤／遺伝かホルモンか／日本の医学における遺伝と脱毛症／毛周期という発想とホルモン／植毛という技法／そしてハゲは病気になった
- あとがき 幻想の男らしさとオヤジの復権——光頭会に集う人々
- 劣等感と感情の分配・配置と空間／情動的身体と劣等感・不安感／ハゲを笑い飛ばす

同書の面白さは、単にネタ的なものだけではない。そこで論じられているのは、身体、情動、物質性といった2000年頃から人文社会科学において注目されているテーマであり、学術的にも面白いものとなっているのである。こうした研究は、日本語で読める文献が少なく、またあってもその理解は容易ではない。そのため、かかる視座から具体的な事象を考察しているという点、さらには身近な対象を平易な文章で論じているという点で、この著書は大きな価値を有すると考えるのである。そして同書をわざわざ『観光学』という雑誌で紹介したのは、英語圏の観光研究においても身体、情動、物質性に関する議論が近年盛んに行われているからである。このような研究の入り口として、観光研究を志す人にも同書は役立つものとなるであろう。

なお、ハゲの問題を考えるにあたっては、本書ではあまり語られていなかった面白さも気になるところである。それは、女性にとっての男性のハゲの面白さである。実はこの書籍を私のゼミで輪読したのだが、学生たち（すべて女性）は、本を紹介するとタイトルを見て笑い出し、是非読んでみたいと言いつつ、さらに思い起こせば、知り合いのある女性は、ハゲた男性を見つけると面白くてついつい頭頂部を凝視してしまうと言いつつ、ハゲがなぜ面白いかをテーマに大学のレポートを書いていた。こうした女性にとっての男性のハゲの面白さは、「自己」への配慮にもとづく男性の劣等感をテーマにした本書ではあま

り論じられていないが、実はそうした男性の劣等感を生み出す大きな源泉の一つなのではないだろうか。

そしてこうした面白さは、「他者」への配慮によって女性から男性に語られることは殆ど無いが、そうしたあまり好ましくない感情の存在はしばしば男性にほめかされる。例えば、私の髪を切っている美容師（女性）は、私が自身の薄毛に言及しても、髪が細いだけといていつもそれを否定する。しかしながら、話の流れでポロリと結婚する男性で一番嫌なのはハゲている人であると口にし、私の頭髪に対する女性のネガティブな感情をほめかす。知り合いの女性編集者には、締め切りに追われていた時の私の薄毛について後で言及されたが（髪の毛が元に戻って良かったという文脈で）、まさにその時は注目しているいろいろ思っていたが気遣って言わなかったことに気付かされる。また、中途半端に毛に拘っている姿が見苦しいだけで、いっそスキンヘッドにしたら問題ないという心温かいアドバイスを女性からしばしばいただくが、そこで例に出されるのは大抵彫りの深いイケメン西洋人であり、典型的な東洋人顔の私ではせいぜい寺のお坊さんを彷彿させる姿にしかないことが想像されてなんの慰めにもならず、その気遣いの大きさから逆に私のハゲへの何らのネガティブな感情が強く感じられるのである。こうした他者への配慮によって直接的には示されないが、その存在がうかがわれる感情、特に異性愛の対象となる女性のそれにより、男性の不安感・劣等感は一層かきたてられるのではないであろうか。こうした他者のまなざしや感情、そしてそれとの不安感・劣等感の関係性についてのさらなる考察も今後期待したいところである。

なお、こうした他者への配慮の問題で、もう一つ気になることがある。それは裏表紙に掲載された著者の写真である。正面から撮影されたその写真は、髪の毛がフサフサに見える。しかしながら、本人は後ろから見れば私と同じく薄毛の部類であり、そのことは本文には記載されている。他者（男性読者）の感情に配慮するのであれば、ハゲについて語っていいのはハゲた人物であろう（冒頭で取り上げたアルシンドのように!!）。最後にこうした配慮が抜け落ちていたのが気になって（抜けているのが本書のテーマと合致しているといえるかもしれないが）、本人に確認したところ、編集者等に指摘されて当人もこの点は認識していたが、自尊心という感情の問題で薄毛がわかる写真にはしなかったとのことである。しかしながら、本文には自身の薄毛について記載しているのであるから、その対応の違いは何だろうかという疑問も生じてくる。対象の違いによる感情の強度の違いであろうか。それとも自覚されない無意識の感情があるのであろうか。それは神のみぞ知る、という事かもしれないが、感情をテーマにしている本書だけに気になってしかたがないのである。